

活動紹介：二次医療機関における切れ目のない産後ケアの試み ～宿泊型サービスから訪問型サービスへの移行～

利根保健生活協同組合 利根中央病院
母性看護専門看護師 立木 歌織（たちき かおり）

私が勤務する利根中央病院は、群馬県北部にあります。昔県下最低だった医療事情の改善を目指し開院した病院であり、急性期から慢性期までこの地域の住民の健康を守ることを常に考え実践しています。

当院は、高年妊娠・若年妊娠・社会的ハイリスク・合併症がある等比較的リスクの高い妊婦が集まる病院です。私は、ハイリスク妊婦にも対応できる力を身につけたいと考え、母性看護専門看護師を目指しました。大学院を修了後復職し、外来を中心に CNS として複雑な問題を抱える母子と家族の拾い出しにあたり、その事例ごとに産科医・産科スタッフをはじめ院内外の専門職と連携・協働し支援を展開してきました。CNS の役割を駆使しながらの支援を通して、院内外の専門職との連携体制や関係性が構築されてきたと感じています。



2017 年に自治体から相談があり、産科の個室を利用した宿泊型サービスの提供を開始しました。退院後何らかの問題を抱え育児に不安がある母子が利用し、CNS として高度看護実践や調整・相談機能を中心に発揮し支援を展開しました。しかし、分娩取り扱い施設の集約化により分娩件数が急増した結果、ベッド稼働率が上がり、宿泊型サービスを希望した時に利用することが難しくなりました。

そこで、訪問型の産後ケア事業の開始を自治体に提案しました。訪問型サービス開始には、これまでに得られた専門職とのつながりを活かすことができました。また、訪問型サービスは、病院の目指す使命にも該当し、院内の承認を得て看護部の方針として開始しました。

産後ケアに関わることで、私自身、病棟や外来での助産実践を超える多くの学びがありました。医療施設で働く助産師の母子への支援は、院内に限定されかつ継続することは難しい状況があります。実際に母子の生活をみて支援する機会をもつことで、入院中から退院後の生活を見据えてしているはずの指導が、退院後の育児にうまく活用されていないと感じることもありました。この学びを今病棟で働く助産師にも経験して欲しいと考えようになりました。産後ケアを経験することにより、助産師の情報収集能力やアセスメント力を育て、母子のその後の経過を自分の目で追える環境は助産師としてのモチベーション向上にもつながると考えます。現在私は看護部の教育担当でもあり、この助産師の学びのシステムつくりこそ、今後 CNS として教育担当を担う私の使命と考え、取り組んでいきたいと思います。